

聴きたいお喋り

堀山 有里子 北海道札幌市 五十一歳

まだ子供達が幼い頃住んでいた街には、広く、素晴らしい公園があった。家と通う幼稚園の中間に位置した公園は、春には息を呑むほど見事な満開の桜。夏の青々と茂った木々の緑は、暑さにも負けず、遊びに遊んで疲れた親子に木陰とそよ風をプレゼント。秋は街道沿いに目を見張る黄色の銀杏の並木の落ち葉と銀杏。お芝居の通し稽古をする大学生達。迫る運動会当日前、リレーのバトン練習に励む中高生。貫禄ある太極拳姿が眩しい御老人グループ。老若男女、みなこの公園内では笑顔だった。とかくいう私達親子もそうだ。嫌な事、悲しい事があった日にも、遊具で遊んだり、日に数回ある噴水の音楽ショーを見たり無心に遊ぶうち、眉間の皺は跡形もなく消え去り、いつしか大声で笑い合っている。「公園来ると楽しい気持ちになって嬉しいね」とある日何気なく話しかけた、その時だ。「だって木もお花も沢山楽しいお話ししてくれるんだもん」という我が子の言葉を耳にして「えっ!?!」と周りで見守る親達が驚く間も有るか無きかのタイミングで「ねく!!」とお友達元気な声がハモる。「昨日はもっとだったよ!」「そうだよね!昨日の方がお喋りだったよね!」どうやら木々や草花の楽しい会話が子供達にはちゃんと聴こえるらしかった。緑の中で誰もが笑顔になり心の元気を取り戻すのは、実は饒舌多弁な、緑のお陰なのかもしれない。大人にも聴こえるお喋りでお喋りしたい私は、欲張りなのだろうか。